

3年2組

 ニコと幸と福との暮らし  
 ～福の誕生とこれから～


## まいこんだ幸福「福」の誕生

2月2日、ニコがまた子山羊を産みました。予期せぬ出産でしたが、ニコも赤ちゃんも元気で無事でした。きれいな白い毛。ニコと幸とおそろいの黒い靴下を履いたような足。幸が産まれた時のことが思い出され、また一人で、安産で産んだニコの強さを感じました。発見したAさんは、とても驚きながらうれしそうに発見した時のことを話しました。Aさんは、小屋を暖める道具や糞を運び、自分にできることをしようとニコと子山羊のために動いていました。すぐに駆けつけてくださった佐藤獣医もとても驚かれていましたが、大きな雌の子山羊であること、今回も1頭のみのお産で、母子ともに健康であることを教えてくださいました。



子山羊は、ニコとミッケとの間に産まれた子で、幸の妹です。昨年9月2日の朝、柵を壊したミッケがニコと一緒にいることがありました。おそらくその時に交尾したのだと思います。ニコのおなかが大きいことを子どもたちと気にはしていましたが、もっと疑うべきだったと反省しています。しかし、ニコが安産で産んだおかげで、とてもうれしいサプライズとなりました。本当にニコに感謝です。そんな2度目の出産でしたが、子どもたちの毎日のお世話が妊娠していたニコを支えていたと言えます。出産のためとは思わずとも、1日も欠かさずエサを用意し、小屋を掃除し、時に散歩に出かけていたこと、安全でくらしやすい小屋であったこと、「ニコ」と声をかけながら愛情を注いでいたこと、今までの働きかけが、ニコのストレスをためず、ニコの安心となっていたのではないのでしょうか。先日は、自分たちでお世話への向かい方を見直す子どもたちの姿がありました。ニコを迎え、喜んでお世話していた2年生の頃と違い、ニコたちのいるくらしが当たり前のように今があることを互いに共感しつつ、最後まで育てると決めた初心やミッケとのお別れで感じた後悔を思い返し、本当にいなくなってしまうお別れがもうすぐである今が、大切な時間だということを語っていった子どもたち。そうやってくらしをつくらしているからこそ、今回の出来事を迎えられるのだと思います。

子山羊誕生の翌朝、ランドセルを背負ったまま走って続々と小屋に集ってきた子どもたちは、「かわいい」「ミッケの白だね」「ちゃんと黒い靴下ははいてる」「幸の時もこんな感じだったよね」「早く名前決めよう。もう考えてきた」と子山羊を見つめたり、「ニコ、がんばったね。すごい」「幸、妹だよ。幸もこうやって産まれたんだよ」とニコと幸に語りかけたりしていました。子山羊の名前は、「福」に決まりました。節分に産まれた福がまいこむ子、幸福兄妹で2人ともニコとミッケの子、2人で幸福になってほしい、お別れの後もずっと幸福でいてほしいという願いがこめられています。お別れまで残りわずか1カ月ですが、思わぬ福がまいこみ、これからのくらしにもより期待が高まることとなりました。抱っこや散歩が待ちきれません。



## 引き渡していくわたしたち

福が産まれて3週間。抱っこしてドキドキやモフモフを感じる時も、走り回る福を追いかけて笑顔になる時も、お乳を飲んだりエサを口に入れ始めたりするのを見つめて喜ぶ時も、子どもたちは、幸との経験を重ねながらよく話をしています。Sさんは、「あなたもこうやって大きくなっていったんだよ」と幸に話しかけていて、まるで親子のようで、素敵だなと思いました。



そんな子どもたちは、福の角が生えてきていることにすぐ気がつきます。幸の角が生えてきたと気づいた時は、角が頭皮から出てきた頃でしたが、福の時はそれより前に気がつきました。「福にも角がそろそろ生えてくるかも」と話す人がいた頃です。目視では分かりづらく、触らないと分かりません。角が出てきているかもしれないという見方で見るから気がつけたのだと思います。ここにも幸との経験が活かしています。そして、角が出てきたということは、除角をするかどうかの判断が急がれるということ。このことも子どもたちは同時に捉え、考え始めます。佐藤獣医から、角が頭から出てくる前にできれば幸の時ほど大変な処置にはならないので、やるならなるべく早く除角した方がいいという助言を受け、福の除角を考えていきました。結果、福も除角をするということになりました。その中でBさんは、「迷ってばかりのわたしは卒業したい」と語りました。これまでの自分を振り返りながら、決めるということを大切にしたいと考えたのだと思います。Cさんは、「除角をしたくなかった人がいたということを知りたい」と書いていました。今までも様々な考えがある中での決定を何度もしてきましたが、決定前も決定後も異なる立場の人を大切にしたいというCさんの思いが表れています。Dさんが、「田中さんの考えを聞きたい」と、自分たちだけで判断すべきではないことを語ったことから、田中さんに意見を求めることとしました。すると田中さんは、「(角を)取ってください」と、わたしたちに除角のお願いをされました。理由はやはり、安全と安心です。タナカファームには、山羊との交流を求めて来られる人もいます。よく保育園の子どもたちが遊びに来て、山羊との交流をするそうです。わたしたちがしていただいているように、小学校に預けることもよくあります。ニコも、わたしたちの安全・安心のために除角をして、わたしたちのもとにやってきました。田中さんの話を受けたDさんは、「もしケガをする人がいると、田中さんの責任になってしまうかもしれない。わたしたちの決定なのに田中さんの責任になるのはおかしい」と語りました。Eさんは、「本当は反対。でも、田中さんがそう言うのなら、そうしていく」と、受け止めていました。Fさんは、「今まで田中さんはお願いをずっと聞いてくれた。こんなことを10回以上やってすごい」と語り、自分たちが田中さんに多くの願いを受け入れてもらっていたことを感じていました。わたしたちは、山羊を飼いたいと願った時から、何度も田中さんをお願いをしています。それは田中さんに限らず、佐藤獣医、大野さん、保護者の皆さん、全校の皆さん、地域の方など多くの人におよびます。しかし、今回わたしたちはお願いを受けました。福は、わたしたちと育っていく山羊ではなく、田中さんやその先の人たちと育っていく山羊なのです。わたしたちは今、引き渡す側の立場に立っていること、これまでとは違うのだということを感じました。

迎えた福の除角の日。佐藤獣医と相談して、角が伸びてきた幸の除角も行うこととし、幸と福の除角をその場で見守るか、教室などで無事を願うかはそれぞれ自分で決めることとしました。叫び声を上げる幸と福に、「がんばれ!」と声をかけ、体に力を入れて手を握りしめて無事を祈りました。今回も丁寧に処置して下さった佐藤獣医のおかげで除角は無事に終わりました。よかったとほっとする思いがありましたが、心に残るのはそれだけではありません。Gさんが音楽会に寄せて、「ニコたちとの生活は、うれしい、楽しいだけじゃなくて、悲しいさやくやしもある生活」、「どうしても、こうかい、しっばい、おどろきはだれにでもある」と書いていましたが、本当にその通りだなと思います。ニコたちとくらすということは、きれいごとだけではない世界に身をおくということ、せねばならない時があり、厳しい決断に迫られることもあるということに改めて実感しました。何が正解か、これが正しいなどということはありません。それでも問い続けていくことが大切なのだと思います。

ニコたちのお別れは、3月12日に決まりました。あとわずか。「後悔なしで別れを迎えたい」と歌ったことの意味を、さらに問うていきたいと思っています。

